

『啓迪集』の鍼法と灸法

木場由衣登

日本鍼灸研究会

『啓迪集』(天正2年(1574)成立)は、日本医学中興の祖である曲直瀬道三(永正4年(1507)~文禄3年(1594))が察病弁治を世に広める契機となった代表的医書である。李朱医学を基礎とする田代三喜の医学を受け継いだ道三の医学は、安土桃山時代の医学を風靡し、後の江戸医学にも強い影響を与えている。

道三の著作は多くあるが、『鍼灸集要』一卷や『秘灸』一卷、『指南鍼灸集』等、鍼灸の専門書も手がけており、鍼灸に対する関心も深かったと思われる。今回は、日本での李朱医学隆盛の出発点に当たる『啓迪集』において、道三が当時の中国医学から何を取捨選択し、また鍼灸に対してどのような視点を持っていたかを考察したい。

『啓迪集』中に引用される医書は、巻末の「所従證経籍」が一覧となっており、これによると『内経』・『靈樞』等の経典から『千金方』・『外臺秘要方』等の隋唐代の大型医書、そして、『脾胃論』(金・李東垣)、『蘭室秘蔵』(金・李東垣)、『格致余論』(元・朱丹溪)、『丹溪心法』(元・朱丹溪)などの李朱医学から、『明医雜著』(明・王節齋)、『全九集』(明・月湖)等の明代医書を多く引用し、全64種の医書からの引用で構成されている。引用される医書にも傾向があり、『丹溪心法』、『袖珍法(大全)』(明・周憲王)、『医林(類證)集要』(明・王璽)、『医学正伝』(明・虞天民)、『(簡効)惠濟方(書)』(明・王永輔、後に『簡選袖珍方』とも)、『玉機微義』(明・劉純)からの引用が格別によく、これが『啓迪集』の主要な構成要素である。

『啓迪集』全八巻の構成は、巻一の前に「弁例」が置かれ、以降巻一から巻八までに全78門の病門で分けられる。更に巻七の婦人門は8篇、巻八の小児門は5篇に分けられ、それぞれ一卷分の量を成す。これら全78門中に鍼灸の記載が散在(「弁例」の灸法一件を除く)し、鍼法または灸法の記載が見られる病門は34門あり、鍼法は11門、灸法は34門に記載が見られる。婦人門の3篇と小児門の3篇にもそれぞれ記載がある。これら鍼灸の条文を引用書目毎に数えると、『玉機微義』21回、『医学正伝』19回、『医林集要』16回が特に多く、次いで『惠濟方』は8回、『婦人大全良方』6回、『丹溪心法』6回、『集驗方』3回、『医林正宗』2回、『医方選要』2回、『外科精要』2回、他にも『衛生宝鑑』、『外科正義』、『丹溪纂要』、『活人指掌』、『青囊雜纂』が1回のみ引用される。これらに含まれる内容は、鍼法と灸法の治法の他に、治病の為に鍼灸を推奨する旨や禁忌等である。

また、『啓迪集』に引用される鍼法は、出血を促す刺法が主である。全体での引用回数は多くないが、典拠のある記載箇所を数えると34の引用があり、巻五・眼目門、咽喉門、巻六・瘡瘍門に記載が集中している。一方、灸法の記載は75箇所あり、量的にも鍼法より多く、巻一・中風門、巻三・淋病門、巻四・勞瘵門、巻五・眼目門、巻六・瘡瘍門、巻八・小児門・雜病證治篇に見られる。『啓迪集』の鍼灸は、圧倒的に灸法が多く、その引用医書も『医林集要』、『医学正伝』、『玉機微義』が殆どである。

巻末の「所従證経籍」に『千金方』、『外臺秘要』の引用を明記され、これらにも灸法や明堂由来の經穴主治等の多くの鍼灸の記載があるが『啓迪集』にはない。また、『鍼灸聚英』からの引用もあるが、巻五・鬚髮門「諸毛美惡」において、気血の多少を審察する鑑別法を見るのみで、『鍼灸聚英』らしい鍼法や歌賦等の引用はない。よって、『啓迪集』に於いて道三が骨子とするのは、明代の医書である。明代の医書の多くに少しの鍼法(刺法)と多くの灸法が点在するが、『啓迪集』もまた同様であり、忠実に明医学特有の鍼法と灸法を受け継いでいると言える。